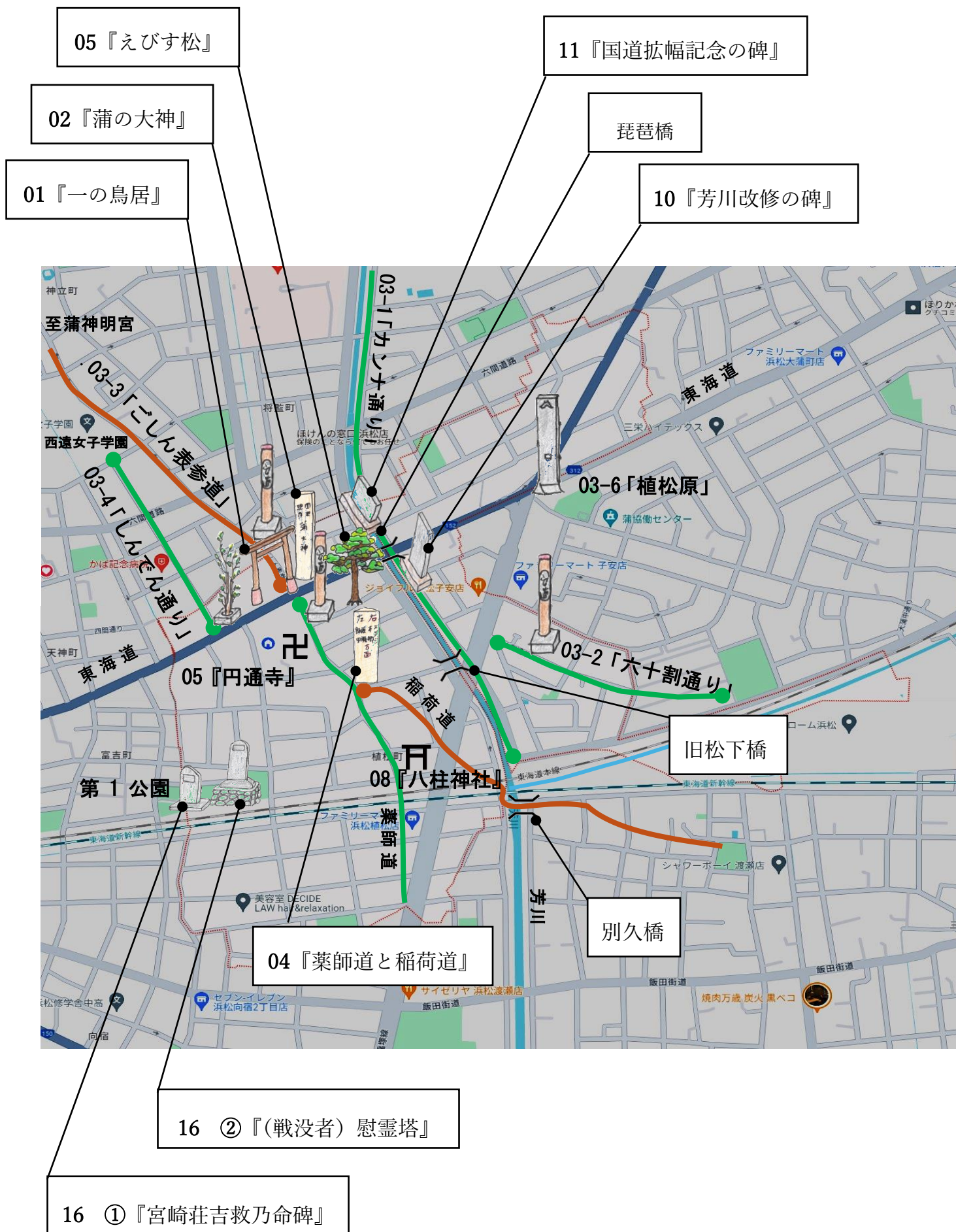


植松町の記

憶
録



『道標、標識、石碑等配置図』



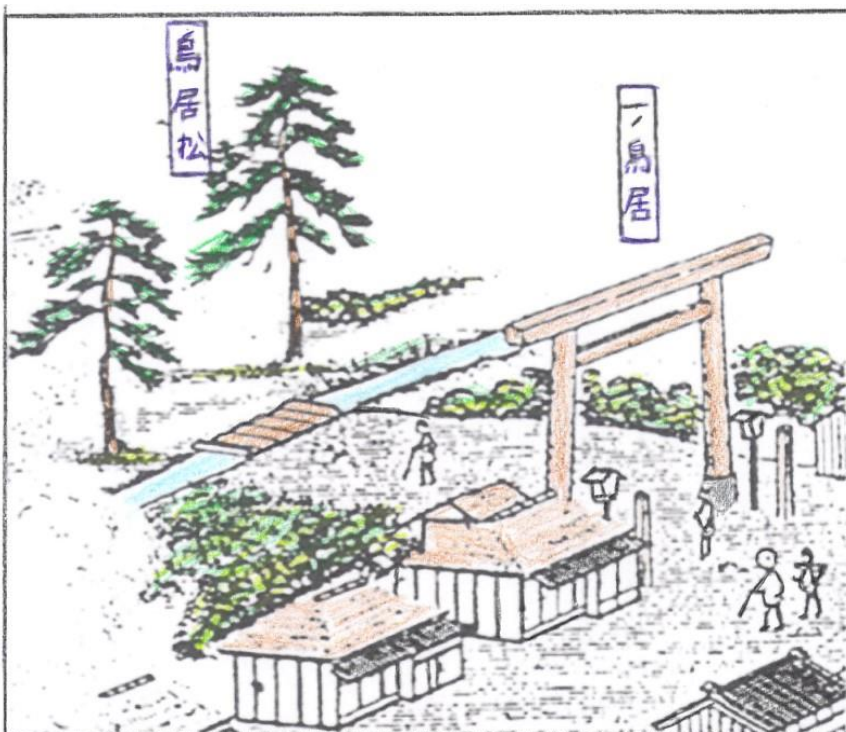
01 『一の鳥居』

松は、神木として祀られたり、縁起の良いもの、めでたいものの代表とされ、私たちに大変なじみ深いものである。

江戸時代の古い絵図をみると、植松地内の東海道の街道筋に大きな鳥居が描かれている。これが今も残っている蒲神明宮の「一の鳥居」であり、神明宮の入口である。

鳥居をくぐって少し行くと小さな川があった。ここが植松と神立との村境で、これより北は昔、神明領であった。その領界を示すため、道の両側に松が植えられ、「鳥居松」と呼ばれていた。西側の松は戦後もしばらく残されていたが、いつしか伐られてしまい今はその面影を知るよしもないが、明治中期に作られた銅版画に描かれ往時をしのばせている。

かつては西遠女子学園付近から北は両側に松の大木が生い茂り(学園内にはまだ松の大木が少し残されている)、特に神明宮の西側は、昼なお暗い松林で夕暮れ時には一人で通るのは気持ちが悪かったと言われるほど松の大木がうっそうと生い茂っていたが、戦時中飛行機燃料の代用品として、松根油を採取するため多くの松が切り倒され、根も掘り上げられてしまい、戦後は住宅地に開発されてしまったため、ごしんの森も縮小され、昔の面影は薄くなった。 P76



02『蒲^{かば}の大神^{おおがみ}』

植松にある一ノ鳥居の横に「国史現存 蒲大神」の標柱が立っている。国史現在（国史現存と同じ意味）社とは6国史（日本書紀、続日本紀、日本後紀、続日本後紀、文徳実録、三代実録）に記載された神社のことである。

三代実録の清和天皇の御代、貞観16年(878年)5月11日の項に遠江国蒲大神に従五位下を授くとあり、蒲大神を祀る社が、この蒲に存在していたことを示している。

蒲神明宮は、古くは蒲大神と称し、中世より神明宮と称したと言われているが、神明宮の創設者と言われる藤原静並の没年は天暦8年(954年)と言われている事からみて神明宮の勧請は、本朝世紀による天慶元年(938年)ではないかと思われるので、蒲神明宮と蒲大神とは別の社ではなかろうか。

千年以上の昔、朝廷の記録に記され、かつては有名であったであろうこの神については古来よりいろいろな説が発表されているが、まだ定説はない。

P70



03 『愛称標識』

03-1 「カンナ通り」（上西町～植松町の芳川堤防沿）昭和 33 年頃、近くに住む夫婦が堤防にカンナを植え育てたのが始まりで、昭和 60 年 3 月 10 日、町の花づくりグループ蒲により芳川堤に 1 万 1 千球のカンナの球根が植えられ、文字通りカンナ通りとなった。

03-2 「六十割通り」（子安団地から西に向かって延びる道）かつてこの辺りは荒れ地だったのを開墾して、60 に割り区画をしたのでこの名が付けられたと言う。



03-3 「ごしん表参道」（一の鳥居～蒲神明宮）



03-4 「しんでん通り」（植松郵便局向側の北へ行く道の入口～西遠女子学園）現在標識は朽ち果てて土台より木が生えている状態。



03-5 「薬師通」（一の鳥居の向側の道の入口から南へ行く道）



03-6 「植松原」 静岡県 of 東海道歴史のふるさと作り推進事業の一貫として、浜松市内に 6 か所の道標を設置することになり、蒲地区の国道 152 号線と中野・子安線の交差点に、高さ 1.7m の御影石で植松原と名付けられ、平成 6 年に設置された。

P185



04『薬師道と稲荷道』

東海道（国道 152 号線）北側の大鳥居は、蒲神明宮参道の入口であり、植松町のシンボルでもある。その一の鳥居の向側を南下する道を俗に薬師道と呼んでいる。200m ぐらい行くと、道の左側にかつて大きなお蔵のある屋敷があって、その屋敷の角に石で出来た道標（道しるべ）が現在も残っている。「右にズダンジ・本郷 左に渡瀬・飯田」とハッキリしるされてある。この道標は昭和天皇のご成婚を記念し、当時の蒲青年団が大正 13 年（1924 年）に建立したものである。

ここからが本当の薬師道であり、稲荷道との分岐点である。現在は区画整理により薬師道も稲荷道も元の道筋はなくなっている。

先ず、右に進むと八柱神社の前に出る。昔は神社の前から少し登り坂となっており、東海道本線の踏切を渡りだらだらと下って田んぼ道に入る。ここから道幅は 2m 足らずで、当時の荷車が通れる程度であった。200m ぐらい進むと道の左側に、一軒家があり、その家を通り過ぎ暫く行くと有名な木下藤吉郎の鎌研ぎ池のある天白神社に出る。この神社を通り過ぎると掛塚街道(150 号線)に出る。この街道を横断してから右に折れると、薬師如来を祀ってある頭陀寺に至る。 これまでを昔の人は、薬師道と呼んでいた。

前記の道しるべに戻って、左に進むと田んぼ道に入る。分岐点から南東方向にある別久橋方面に進む。田んぼすれすれの低く狭い道で、雨でも降れば直ちに冠水するような道であった。昔の別久橋は、新幹線の真下ぐらいで東海道本線と並んでいた。特に、本線をくぐる前あたりから別久橋前後などは、草や葦が繁っていて、このあたりは日中ですら薄暗く幽寂な辺境に誘われる気持ちで人々は通ったものである。その橋を渡って南東に約 200m 進むと、渡瀬町の正授院に至る。その寺の裏道を通して、農家の楨囲いの間を抜けると西の郷(現三和町)慶福寺の前に出て、暫く行くと蒲冠者範頼公の屋敷であった現在の稲荷山龍泉寺に至る。この道を、昔の人は稲荷道と呼んでいた。



05 『えびす松』

円通寺前あたりから東に行く道の中央に以前、「えびす松」又は「えびす木」と呼ばれていた幹の周りが2mもある太い松の木があった。この松は明治の初めに植えた3代目だそうだ。初代、2代目の松については、次のような話が伝えられる。

昔ある時、一人の美しい尼がこのあたりを通りかかり、あまりにもこの村が美しく平和な様子に心引かれ、立ち去り難く思い、尼はここに庵を結んだ。村人はこの美しい尼に色々と世話をした。ある朝、村人が団子を作って、庵を訪れてみると尼の姿はどこにもなく、次のように書かれた一枚の書き置きが残されていた。

「長い間大変お世話になりました。皆さんの親切は決して忘れません。

私はここから西国の旅に出ます」

そして庵の脇には、たぶん尼が植えたと思われる若い松の木が一本植わっていた。村人は尼がいなくなり寂しく思ったが、この松の木を尼の代わりに大事にした。するとみるみる大きくなって天にも届くかと思われる程に成長していった。

それから長い年月が過ぎ、この松も年老いて枯れてしまい、ある夜、風もないのに倒れてしまった。この枯れた松の脇から新しい小松が生えてきた。村人はこの松を2代目の松として、初代同様に大切にした。この木は横へ横へと枝を伸ばし、大きくなったので雨の日などには、人が雨宿りができ、夏の暑い日には子供らがその下の影で遊べるようになった。又、旅人は遠方から、その松が見えると安心し、木陰で旅の疲れをいやした後で旅立ったとも言われている。

そして、この木の枝を伸ばした形が遠くから眺めると恵比須さんが座っている姿に似ていたので、誰が言うともなしに「えびす松、えびす木」と呼ばれるようになった。この2代目の松も年には勝てず、明治になると枯れてしまい危険になったので切り倒されてしまった。この松の二の枝からは、二斗臼がいくつも出来たと言われるからその大きさは相当のものだった事だろう。その後3代目の松を植え、同じように「えびす松」と呼んできたが昭和40年頃、道路拡張工事の為、やむをえず切り倒されてしまった。この「えびす松」があったので植松町の定紋の三階松が出来たと言われている。



06『円通寺』

臨済宗方広寺派 大慈山圓通寺

当山は室町時代の中期の応永 16 年(1409 年)大本山方広寺の開山、無文選禅師の法孫に当たる慶道大和尚に依り創建された由緒ある寺で、安土桃山時代から江戸時代にかけて隆盛を誇ったと伝えられている。

当時の和尚は靈夢の御告げにより、稲荷大明神を鎮守として境内に安置した。この稲荷大明神は他のお稲荷様と異なって北向に建てられており、以来この北向稲荷大明神を信仰する方々には、靈感を賜るという事で近在の人より「人助け稲荷」として知られている。さらには商売繁盛のより所として大方の信仰を集めた。

ところが、先の大戦により昭和 20 年 1 月 3 日の空襲の際、山門のみを残し全焼してしまったが、当時の和尚の奥様が御本尊様（観世音菩薩）を背負って防空壕に逃げたため現在も安泰である。なお、幸いにして山門の一部は焼損したものの、原型をそのまま留めていた。この山門は今から約 300 年前に建築されたと聞いており、昭和 30 年頃までは現在のお稲荷様の少し西で南向きに建っていたが、境内拡張に当り現在地に移転された。

この寺には俳人「稲垣^{えいしえ}栄枝」や画人「伊藤^{えんけい}煙垞」などの知名人の墓もある。

P219



北向稲荷



山門

07『画人 伊藤煙堦』^{えんけい}

煙堦は、春蔵が本名、天明4年(1784年)植松で生まれた。花鳥、山水、人物等が大変に巧みで、「植松の煙堦」として知られていた。彼の画歴は詳らかでなく、絵は掛川の村松以弘に学んだと言われるがはっきりしていない。

文化(江戸時代)末期頃、天神町の大雄庵(大雄寺)8代住職であった楚州は、詩人であり、学識も豊富であったので、多くの弟子を育てたと言われているが、煙堦もその一人で、彼に影のように付き添っていたと言われている。楚州の詩集「館山寺吟草前遊」「館山寺吟草後遊」に煙堦が、淡彩で細密な挿絵を描き、煙堦の「秋景山水図」等に楚州が賛詩を書き添えたりしていることから、彼らの間に深い交友があったことがしのばれる。

安政4年(1857年)74歳で没し、法雲寺に葬られたが、後に植松の円通寺に移され、墓が現存している。 P236



伊藤煙堦筆山水の図

『俳人 稲垣栄枝』^{えいし}

稲垣栄枝は本名源七といい、稲垣正幸氏の3代前に当たる方で俳人としては松島十湖との親交が厚かったことが伺われる。

明治時代は植松村の戸長(当時は知事の辞令による、現在の自治会長)として地域のため非常に貢献されたと伝えられている。

国鉄東海道線の敷設に関与していたことから、蒲村植松の用地買収金の増加を求めるべく、小松原英太郎知事に明治25年10月に陳情し認可を得たことは有名である。陳情の理由は天竜川の堤防の決壊に依り入水した田畑が荒れ、生活が困窮していること、等々。

栄枝の逝去は大正2年。今のお墓は先代七郎氏が大正13年に建てたもので

「水ばかり、水の味なり、雲の峰」

の句が碑に彫みこまれている。この句は死の直前に書かれたもので、今は水だけが水の味がするが、他のものは何も食べてもその味が解らない、ということを詠じたものである。栄枝の墓は円通寺内に現存している。 P237

08『八柱神社』

本殿は安政2年(1855年)9月に再建、明治7年(1874年)5月27日六所神社と合祀、八柱神社と改めた。その本殿は現在の公民館の所に南向きで建てられていて、東側に社務所があった。大正9年に西向きに建て替えられた。参考までに他に本殿が西向きに建っているのは、浜松では中田島町の神明社と2社だけである。

植松町の八柱神社には末社として、九頭竜様と言って歯の守護の神を祀っている。その九頭竜様の前に灯籠が左右に一基ずつ、右は秋葉山の常夜灯で明和8年(1771年)2月吉日と彫刻、左は九頭竜大権現で天保年間(1830年～1844年)のものである。

植松町八柱神社の特徴は、子供の好きな神様で賽銭は子供が拾い、そのはしゃぐ声を聞いていれば、満足する神様で、昔ある時ある人が賽銭箱を作った所その人が重い病に伏したため、直ちに取壊したら病は治ったと言う。それ以後お賽銭は子供達に拾わせたと伝えられている。現在は遊ぶ子供は殆どいないので参拝者は賽銭を拝殿に投げ入れている。

以前の祇園祭は曜日に関係なく6月30日、7月1日に行っていたが、最近では7月の第1土曜日、日曜日に行われている。

戦前は若衆によって数10本の打上げ花火を奉納、また松の木に太い丸太をくくりつけ、大きなしょう鉦を吊して打ち鳴らした。(鉦は戦時中に供出)その松の木は切り倒して、現在は屋台の通路となっている。また子供達は浴衣姿で手に「ほおずき提灯」を持って宮参り、門前には数軒の露天商が出て老若男女で非常に賑わった。戦後も青年団が組織されて、数年に亘り若衆による芝居を見せて祭りを盛り上げて来たが、いつからかその習わしもなくなり神事だけの祭りが続いて来た。

しかし平成2年から、町民の理解と信頼を得て、凧揚会員を中心に、婦人会、子供会、老人会の協力もあって、手踊り、カラオケ、子供の花火大会、さらには凧揚会員の出店もあって、戦前にも劣らない程の賑やかな祭りが行われている。 P100



しょう
鉦



ほおずき提灯



若衆の芝居

09『芳川の曲り』

芳川、その流れはその上流にある多くの水田の溢れ出る水を集めることにより始まっていた。現在は上新屋、丸塚、上西、西塚、神立、植松など蒲地区を通り、飯田地区に流れている。最近は、河川と堤防の整備もされて、春ともなれば風揚げ会員手植えの桜も咲き、また、堤の両側には、美しい花が植えられており、通行人の心を和ませてくれる。

2003/3/16 植樹



以前の川巾は現在の3分の1以下で、しかも土手らしい土手もなく、宮竹方面よりくねくねと曲がり両側には柳がなびいていた。現在の将監大橋から約150メートル位下流で堤防道路より西側に約150坪の溜池に一旦流れ込み、池の東南の方から浜信の方向に流れ、西に少し戻った所に、小さな溜り池があって、その上に東海道の木製の橋が架けられていた。

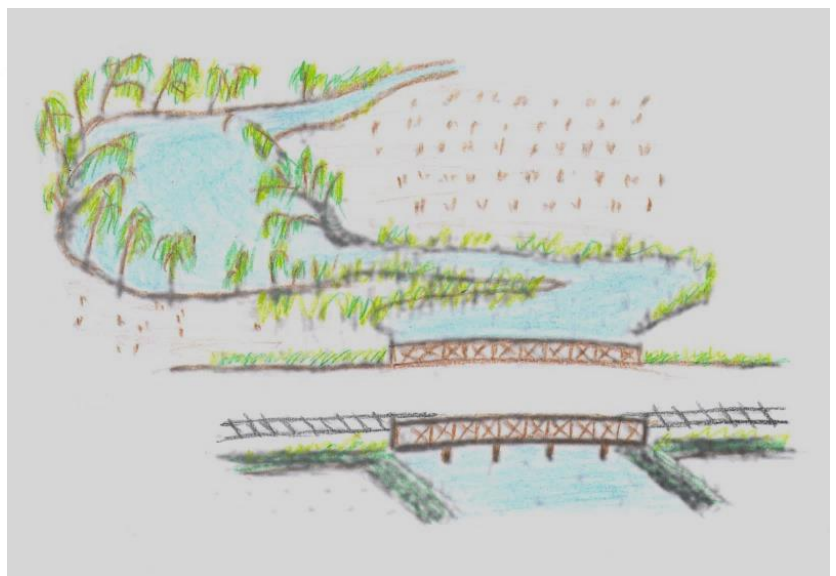
最初の溜池は殆ど粘土で、池の周りには柳が覆うように繁っていて、深さは一定でなく小魚の住家になっていた。橋の上流には葦が繁り、最初の溜り池から橋のあたりを曲りと呼んでいた。夏になると溜り池は河童天国となり、日没まで水遊びが続き、さらに橋の近くは釣人でいつも賑わった。また、夕涼み等の憩いの場所でもあった。橋より下流は殆ど真っ直ぐに渡瀬の別久橋に向かって流れていた。その頃の芳川の曲りは、住民の生活の中心の一つでもあったのだ。

P265



琵琶橋の下流

旧松下橋（木造、昭和59年撤去）



曲がりのあった琵琶橋付近

路上に軽便の線路が見える

10『芳川改修の碑』

当渠は芳川の上流にして古来かつて改修を見ず あし荻叢生しいばら

溝を覆い汚水停滞灌漑に使せず豪雨氾濫し為に流域一帯被害

に苦しむこと久し 村長伊藤榮松氏痛く之を憂い村民の熱望を酌

みて改修の途を当局に請えり 県宰飯沼一省氏深く地方の苦悩

を察し県費の一部を割きて工費の補助を決し以て工を起こし

め鋭意其の達成をうながせり 昭和十四年七月市村合併の実施にあ

うや続工の責務浜松市に移譲せりといえども工事進捗の実績に徴し

完成期してまつべし当初工費補助案の附議せらるるに際し不

肖たまたま県議員の職に在りて微力を致せりとの由縁に因り其

の労くを偲ばんとする村民各位の切々なる心情より永遠の記

念として河川の命名を余に依頼せり よつて「もとよし川」と名付く

「もと」は元也源也基也本也乃ち本流は芳川の源流にして当地農

産業の基本たり「よし」は吉也良也善也好也且里なお栄に通じ芳に通

ず即ち本流の改良善好を意味し本村将来の吉運繁栄を表徴し

て千古に芳はしかるべきを希うて止まざる所也

ここに命名の由来を録し以て後世に伝う

昭和十四己卯年八月

飯塚榮隆謹誌



毛 登 与 志 川

10『芳川改修の碑（元書体）』

当渠ハ芳川ノ上流ニシテ古来曾テ改修ヲ見ズ蘆荻叢生シ荊籬
溝ヲ蔽ヒ汚水停滯灌溉ニ便セズ豪雨氾濫シ為ニ流域一帯被害
ニ苦シムコト久シ村長伊藤榮松氏痛ク之ヲ憂ヒ村民ノ熱望ヲ酌
ミテ改修ノ途ヲ当局ニ請ヘリ懸宰飯沼一省氏深ク地方ノ苦惱
ヲ察シ縣費ノ一部ヲ割キテ工費ノ補助ヲ決シ以テ工ヲ起コシ
メ銳意其ノ達成ヲ促セリ昭和十四年七月市村合併ノ實施ニ遇
フ遇ヤ續工ノ責務濱松市ニ移讓セリト雖工事進捗ノ実績ニ徴シ
完成期シテ俟ツ可シ当初工費補助案ノ附議セラルルニ際シ不
肖偶々縣議員ノ職ニ在リテ微力ヲ致セリトノ由縁ニ因リ其
ノ勞勩ヲ偲バントスル村民各位ノ切々ナル心情ヨリ永遠ノ記
念トシテ河川ノ命名ヲ余ニ依囑セリ仍テもとよし川ト名付ク
もとハ元也源也基也本也乃チ本流ハ芳川ノ源流ニシテ當地農
産業ノ基本タリよしハ吉也良也善也好也且尚榮ニ通ジ芳ニ通
ズ即チ本流ノ改良善好ヲ意味シ本村將來ノ吉運繁榮ヲ表徴シ
テ千古ニ芳ハシカル可キ
ヲ希ウテ止マザル所也
茲ニ命名ノ由来ヲ録シ以テ後昆ニ傳ウ

昭和十四己卯年八月

飯塚榮隆謹誌

11『国道拡幅記念の碑』

この道は、美しい松並木の東海道でした。

そして50年まえ、軽便鉄道が敷かれて8mの

巾となった。(明治41年)

そのうち軽便はバスとかわり、日まに激しく

なる交通は道中を狭くした。(昭和12年)

いま、多くの人々の努力によって20mの国道

一号線が完成した。

昭和33年6月



建設省	磐田工務所	所用長官	用地官	工務課長		市長	濱松市 市議會	市議員	施工者	国道拡幅委員	委員長	副委員長	関係者の氏名																
戸沢 弥平	内山 新次	熊岡啓一郎	藤田 政治	小野江孝一郎	福元永太郎	稲垣 寅市	内山 晴帆	杉本 正治	飯尾 半蔵	金田 忠雄	名倉 成夫	渡辺 博	金子 利夫	水下 鑑一	寺田 徳雄	山本 清一	中村 彦八	中野 増栄	蛭沢 助	岡部 林作	大澄耕太郎	清水 義雄	竹内 一平	長谷川 清	鈴木 重雄				
植松町	稲垣 七郎	鈴木 輝雄	大場 虎平	戸沢賢次郎	戸沢惣一郎	丸半木材株式会社	藤田 孝一	大畑 弘	藤田 国松	稲垣 三好	長谷川まさ	橋爪 清八	広野 昭二	小倉 辰夫	稲垣 六郎	平野友三郎	稲垣 甚平	竹内 政治	観峯 榮一	稲垣 安雄	中村 秀一	福田 宇平	木本 孫一	金田 徳次	野田 幸一	竹内 盛男	鈴木 重光	鈴木 稔	曾我 義雄
酒井 金市	廣野 茂	廣野知恵子	北山 博一	成瀬 弥助	内山清九郎	廣野 しま	西尾 昇	稲垣近三郎	竹内 豊吉	大隅 義春	小林まさ子	西藤小太郎	稲垣 幸雄	鶴飼 正巳	廣野 康次	花崎 金藏	田中 昭三	村松 幸平	森 六郎	白井 孝栄	竹田 正治	早島喜代太	四ツ谷友一	内田広之進	中野 繁雄	内山信太郎	清水 弥一	石川 孝一	
小川 勘司	滝波 重助	玉置 鎮雄	竹内愛次郎	竹内七三五次	竹村 保彦	袴田まつゑ	岡部佐智子	鈴鹿 茂	子安町	袴田 新一	三上 武志	岩田松之助	小林 猛夫	大塚 利衛	市川市太郎	米山 光彦	松山 隆	鈴木 清吉	杉山 義二	新村 弘	鈴木 なつ	尾藤誠一郎	永田 静雄	鈴木 清国	伊藤 正	野沢 和馬			



馬込川を渡る軽便

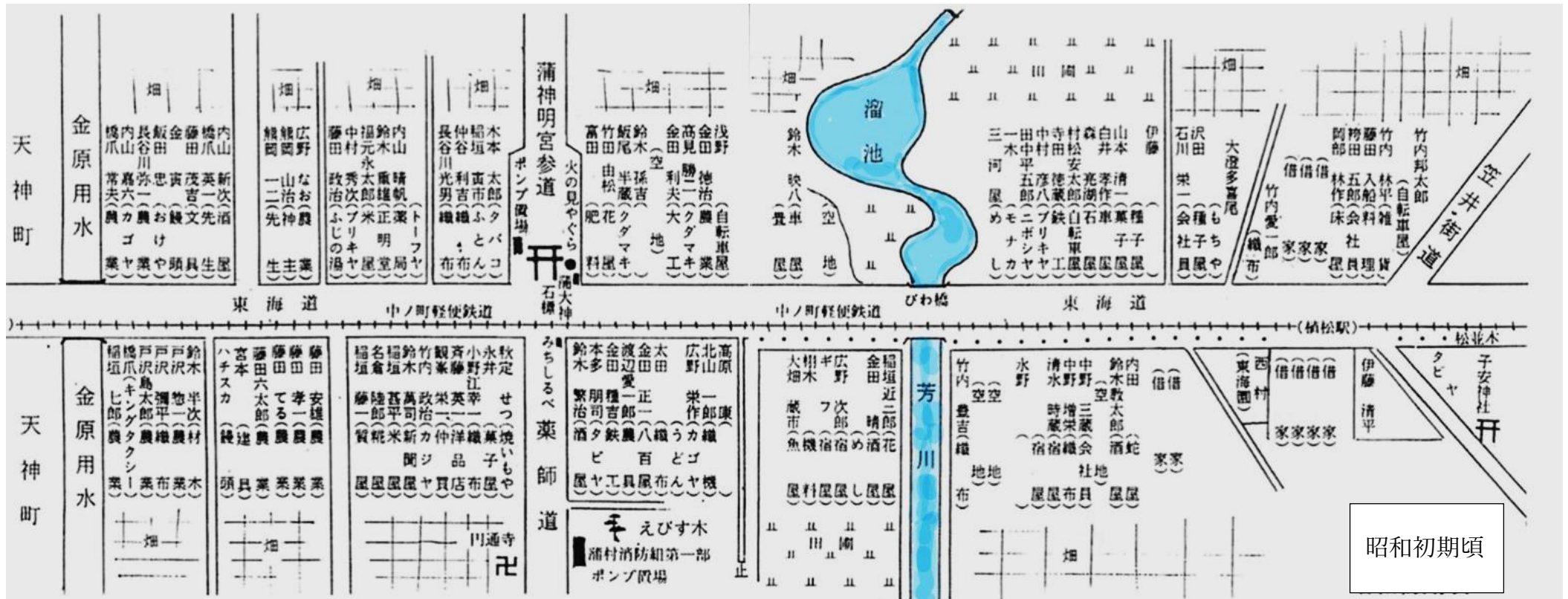
12『松並木と商店』

東海道の松並木は、街道の南側に多く残されていた。約1mぐらいの土盛りが続き、所々に切れ間があった。その土手の上に間隔は不規則であったが、直径50～60cmの松が植えられていてその風情は美しく見事であった。

植松は琵琶橋を挟んで東西に数本の松が植えられていた。その松の外側に商店が軒を並べて繁盛していたが、時の移り変わとともに商店の種類や軒数も異なっていた。

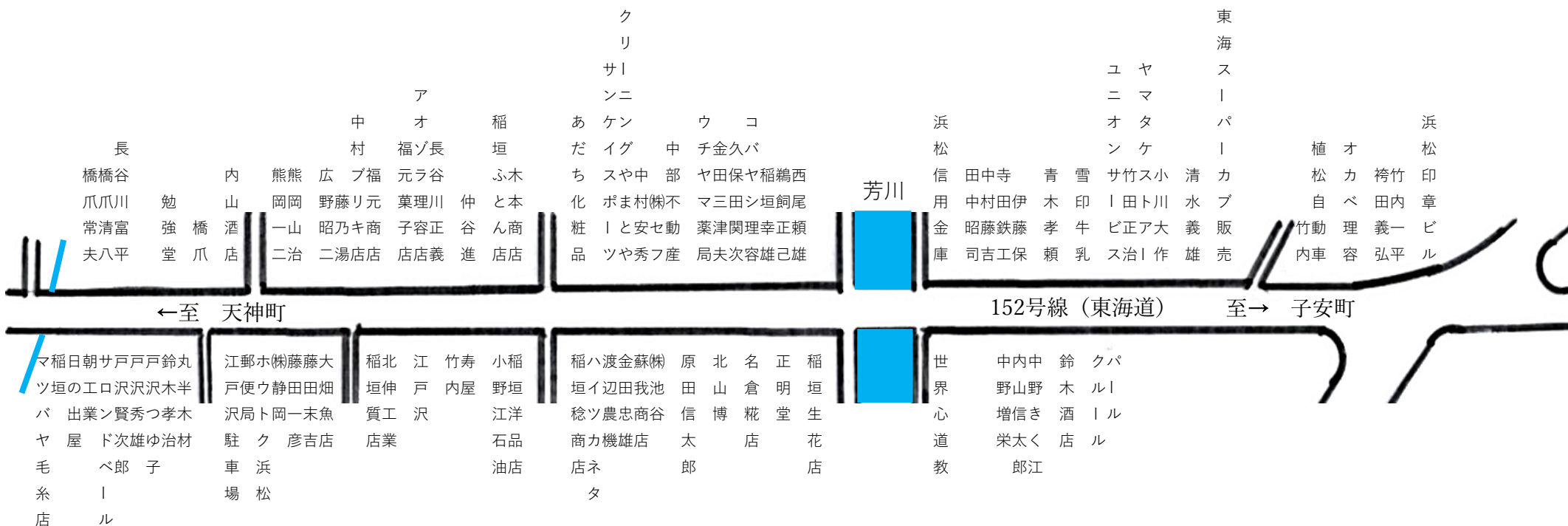
大風の時など古木が折れて街道に散乱、青年団によって片付けがされていた。また大雨の時など、特に橋から西は道路より50～60cmも水位が上り、国道を横切る雨水が激流となり通行に支障が出たため、青年団の協力により松の木から木に太いロープを渡して通行の手助けをした。それでも水の勢いによって流されて水死者が出たこともあった。

心の寄りどころであった松並木も道路の拡張により切り倒され、現在はその面影すら見られないが、安間町方面に数本残っているのが、懐かしく思われる。 P140



13『植松町街道沿いの町並み』

年代は1981年（昭和56年）以降 ゼンリン住宅地図参照



14『植松町の沿革・データ』

「沿革」

1889 年（明治 22 年）4 月 1 日 [明治 22 年月 11 日 大日本帝国憲法発布]

町村制の施行により、神立村、将監名村、西塚村、上西村、丸塚村、上新屋村、植松村、宮竹村、大蒲村、下村（現子安町）が合併して長上郡蒲村が発足。

1896 年（明治 29 年）4 月 1 日 [明治 28 年 4 月 17 日 日清講和条約調印]

郡制の施行により所属郡が浜名郡に変更。

1939 年（昭和 14 年）7 月 1 日 [昭和 14 年 9 月 1 日 第 2 次世界大戦勃発]

浜松市に編入。同日蒲村廃止。

2007 年（平成 19 年）4 月 1 日 [平成 19 年 2 月 18 日 第 1 回東京マラソン]

浜松市が政令指定都市に移行し、旧村域は東区の所属となる。

2024 年（令和 6 年）1 月 1 日

浜松市の区再編に伴い東区全域は中央区に再編される。



「植松町データ」 2024 年 4 月 8 日現在

面積	0.4849km ²	(上西、丸塚について三番目に広い)	
世帯数	1,587 人	(世帯数、人口は上西について二番目に多い)	
総人口	2,838 人	男 1,535 人	女 1,303 人
植松第 1 公園	5,538.8m ²	番地：植松町 78	
植松第 2 公園	2,833.7m ²	番地：植松町 271-1	
植松第 3 公園	2,184.4m ²	番地：植松町 1483	
植松第 4 公園	1518.8m ²	番地：植松町 79	

15 『1 トン爆弾（池）』

「1 トン爆弾投下地点…原爆投下訓練の悲しい記録」

1945 年（昭和 20）年 7 月 26 日（広島投下 1945 年 8 月 6 日）、アメリカ軍のガム島近くのテニアン島の基地から飛び立った B-29 爆撃機 6 機のうち 1 機が、当時爆弾の「ごみ箱」と言われ、残った爆弾の処理場に指定された浜松に、搭載されていた「パンプキン」模擬爆弾をゴミを投げ捨てる様に投下し、急旋回して、テニアン基地へ帰って行った。

模擬爆弾とはいえ重量 10000 ポンド（4.5 トン）の爆弾が将監町地内の畑の中に投下され、直径 50m 以上の大穴があき、深さは 10 数m も達し、飛び散った土で周りの畑が 3~4m 以上も盛り上がって凸凹になった。

以後、この大穴には水が溜まり池状態になっており、当時、「1 トン爆弾」と呼ばれ、戦後長い間放置されていた。その後区画整理事業により埋め立てられ、今はその面影は全くない。

その位置は六間道路上で将監町のファミマの西 100m ぐらいの所。昔、植松町の子供達も夏になると毎日のようにザリガニや小魚、鯉などを取りに行っていた。



パンプキン爆弾（かぼちゃ爆弾）

第二次世界大戦中にアメリカ軍が開発、使用した爆弾。弾体が橙黄色に塗装されていたことから「パンプキン（かぼちゃ）」の名がある。1945 年 8 月 9 日に長崎に投下された原子爆弾の模擬爆弾として知られ、日本では一般に模擬原爆と呼ばれている。



B 2 9 爆撃機

16 『植松第 1 公園内の石碑』

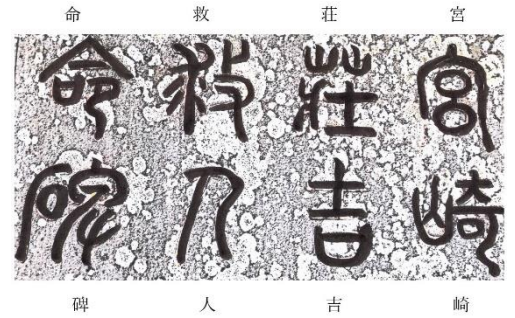
植松町第 1 公園内西側南端に 2 基の石碑がある。

① 「宮崎莊吉救乃命碑」

建立年月 明治 45 年（1912 年）6 月

建立者 杉浦秀次郎

由緒 富吉町により本誠寺横に建立後、区画整理で現在地に移築



安政 4 年（1857 年）江戸幕府 13 代将軍、徳川家定の時代の頃、天竜川氾濫時に起こった人命救助の話。

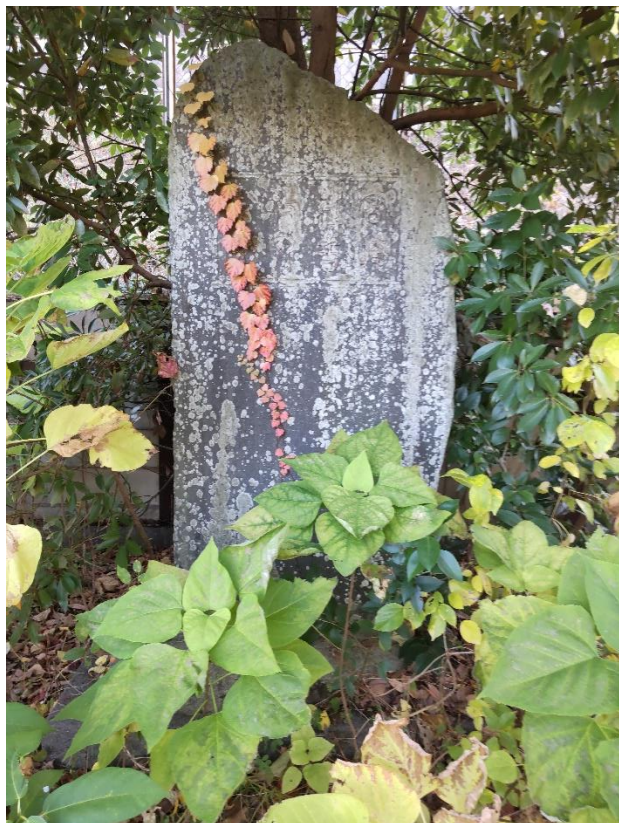
② 「(戦没者) 慰霊塔」

建立年月 昭和 32 年（1957 年）3 月

建立者 富吉町自治会・遺族会生還者

由緒 富吉町により本誠寺横に建立後、区画整理で現在地に移築

① 「宮崎莊吉救乃命碑碑」



② 「(戦没者) 慰霊塔」



16-①『宮崎莊吉救命の碑』

Google 開発の AI「Gemini」で翻訳

安政4年7月に天竜川が氾濫し、堤防が決壊した為、川沿いの村々が大きな被害を受けた後、至る所にまだ水が溜まっていて、通行人や子どもたちが涼を求めてその中に入っていた。そう話していたのは、浜松に住む杉浦秀次郎という人だ。

「当時、まだ五歳だった秀之（秀次郎）は、天神町にある実家へ向かう途中、他の子供たちが水遊びをしているのを見、自分も一緒に遊び始め夢中になってしまい、我を忘れてしまった。

そして誤って水に落ちてしまい溺れかけていた。周りの人はみんな助けようと思いつつも、誰も助けに行かなかった。その時、一人の勇敢な人が現れ、水の中に飛び込んで私を助けてくれた。それはまさに九死に一生を得たようなもので、秀之にとって大きな幸運だった。それ以来、私は昼も夜もその人に恩返しをしたいと思っていた。

大きな恩を受けた人が誰なのか分からず長い年月が過ぎた。ある日、秀之は舞阪へ向かう途中、人力車に乗り、老いた車夫と話をした。その中で、安政の大洪水の話になった。

なんと、この老いた車夫の宮崎庄吉さんが、昔、自分の命を救ってくれた人だったとは。驚きと感謝の気持ちで一杯になり、過去の出来事を思い出し、思わず涙が溢れてきた。そして、また後日、ゆっくりと話をしたいと約束した。

後に彼の家を訪ねたが、庄吉さんはすでに亡くなっておられ、会うことはできなかった。秀之は深い悲しみを感じ、まるで春の木の葉が散るような物悲しい気持ちになった。今では私も60歳になり、家は裕福ではないが、命を救ってくれた恩人のことをいつも思っている。」

ますます、この出来事を後世に伝えるために碑を建てたいという気持ちが高まっている。この出来事の意義は非常に大きく、特に庄吉の義侠心は称賛に値する。

さらに、恩を受けた人が恩返しを誠心誠意行ったこと、そして助けられた人が勇気を持って仁義をもって行動したこと、この両者はともに称賛に値し、立派なことです。この事を世の人々の手本とする為に碑を立てて記録すべきです。

明治四十五年六月 静岡縣濱名郡長從六位勲六等天野千代丸撰

伊藤豊太郎書

江間鐵藏刻

16-②『宮崎莊吉救乃命碑（元書體）』

錦雞間祇候正三位勲一等男爵野村素介篆額

安政四年七月天龍川汎濫堤防決壞沿岸村落概被其害災後到處猶存渚水有行人鄉童入其中鎖暑者云濱松人杉浦秀次郎當時僅五歲赴天神町之生家途賭羣童之游於水中嬉戲忘己誤陷水將溺死觀者皆躊躇無敢救濟者時有一俠漢躍身入水得救是於萬死之中秀之幸亦可謂大矣爾來日夕雖欲酬其鴻恩未知其何人空經歲月一日秀往舞阪途側腕車與老車夫共行語談偶及安政之洪水初如此老車夫為己救命者宮崎庄吉且怡且謝轉不堪今昔之情輒約以他日別袂後訪其家然庄吉既歿不在秀之感懷蓋有比風木之悲者今秀珍六旬家運無隆昌思救命之恩愈切欲建碑刻此顛末以傳不朽其意思大可至庄吉之義氣更可前者知恩輸誠後者勇義為仁二者俱可賞揚見事也仍應需作此碑誌為後人之鑑焉

明治四十五年六月 静岡縣濱名郡長從六位勲六等天野千代丸撰

伊藤豐太郎書

江間鐵藏刻

『植松町の変遷』 航空写真

1963 年頃 (S38)



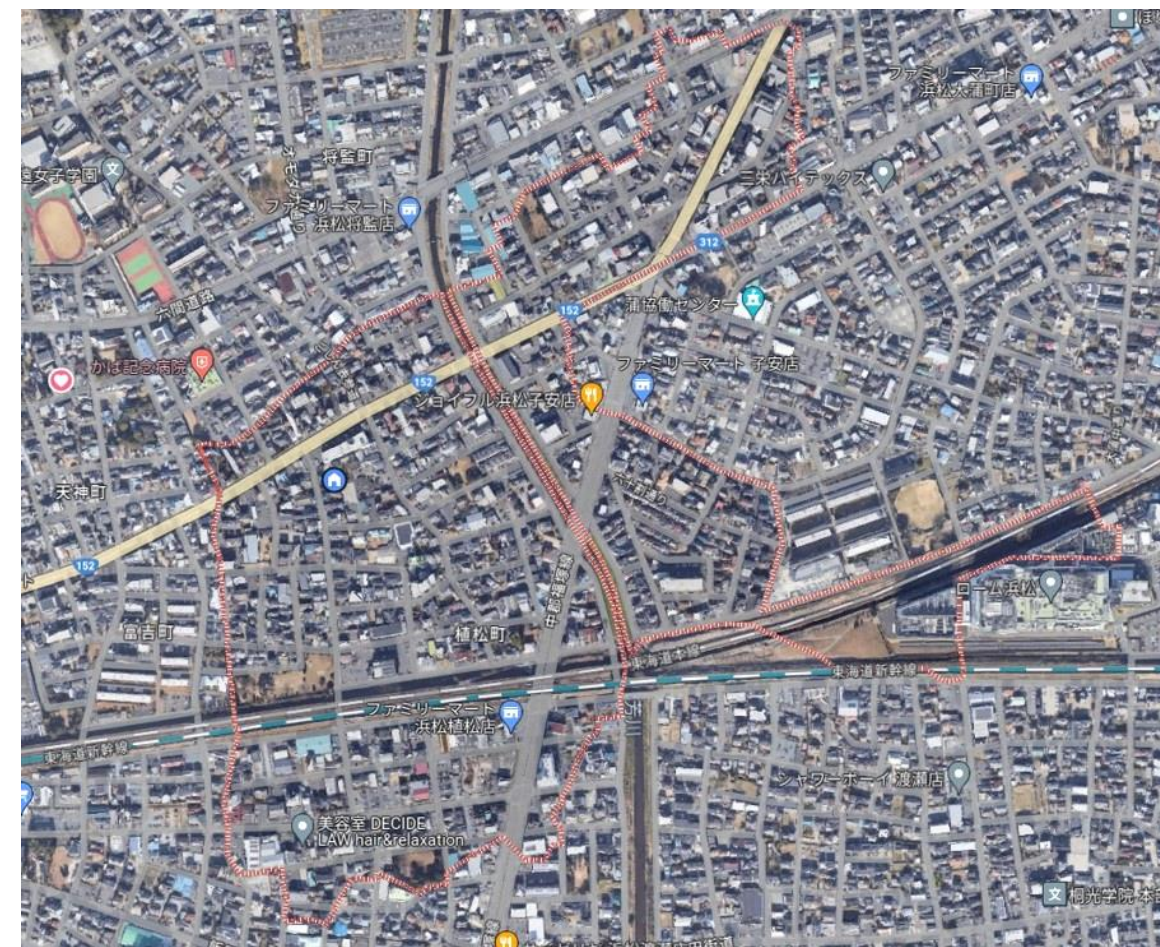
1975 年頃 (S50)



1980 年頃 (S55)

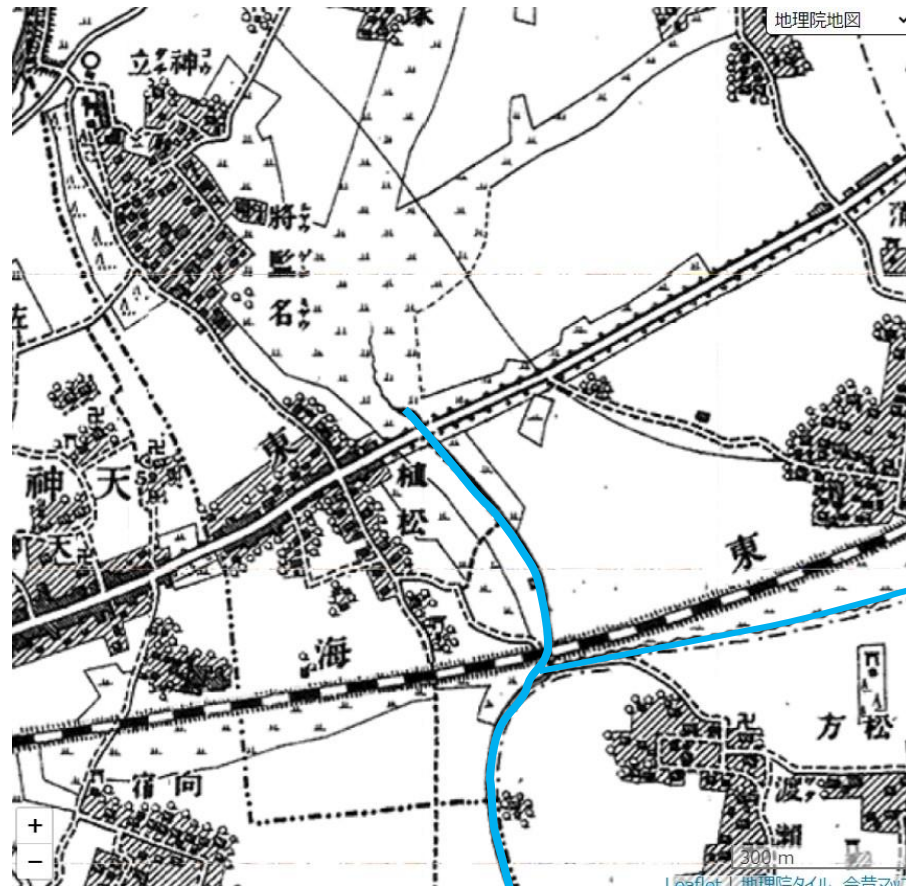


2024 年頃 (R6)

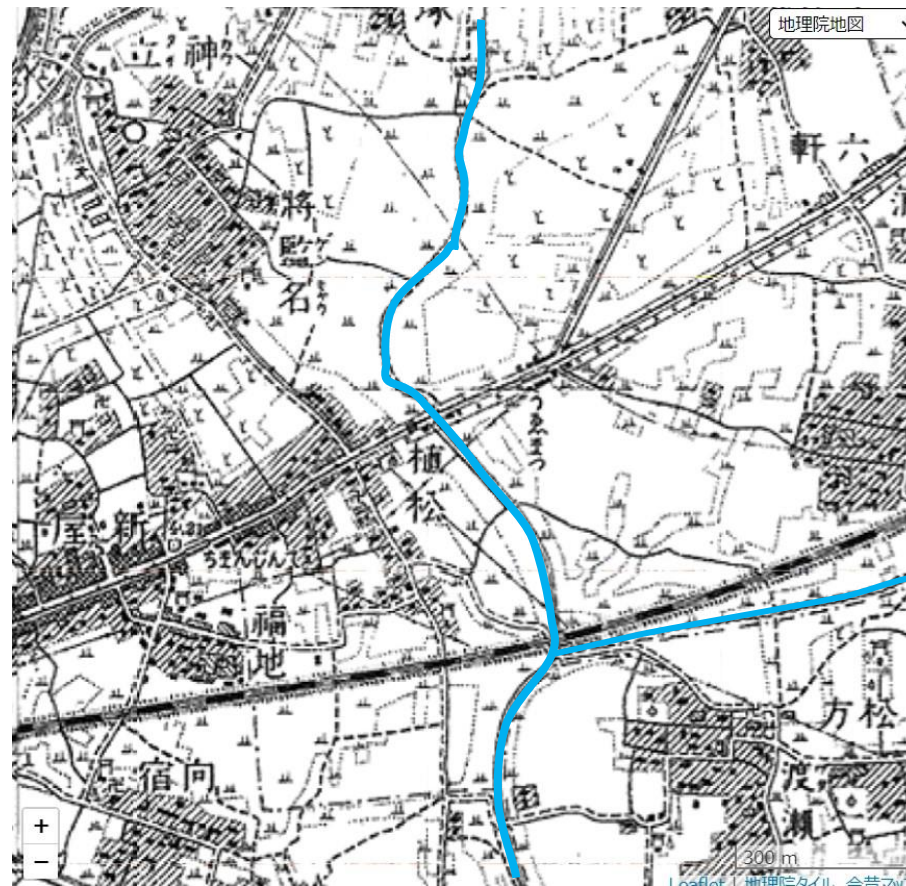


『植松町の変遷』 地理院地図

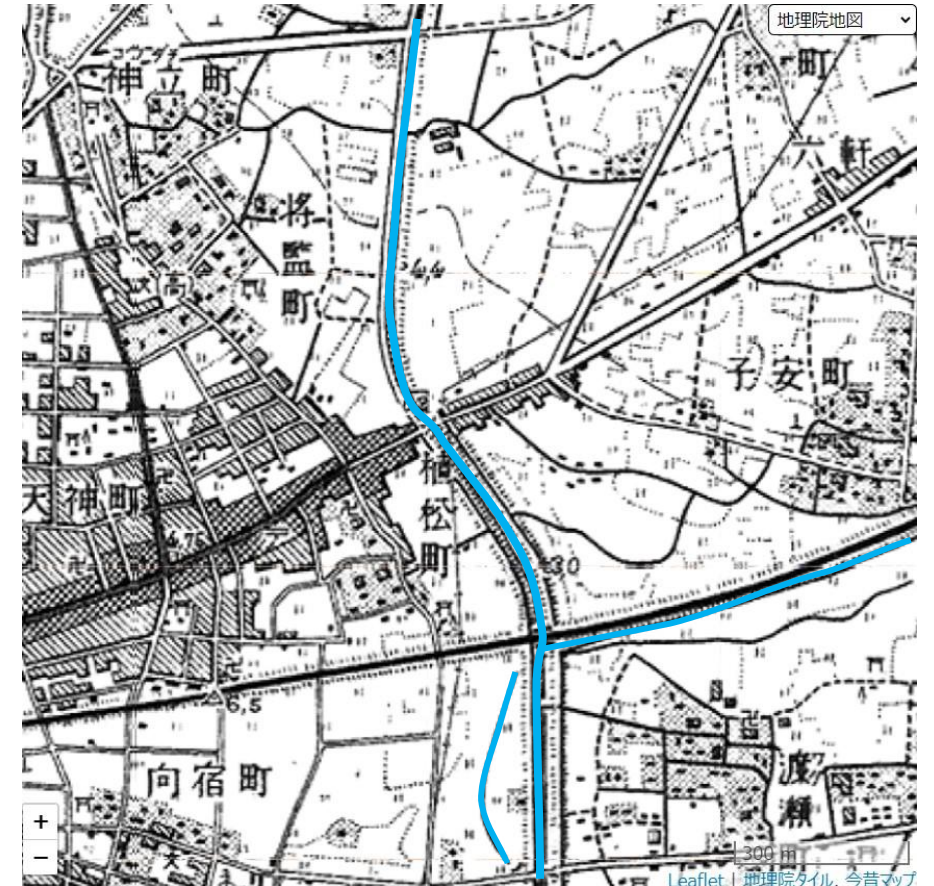
1889～1890 年 (M22～23)



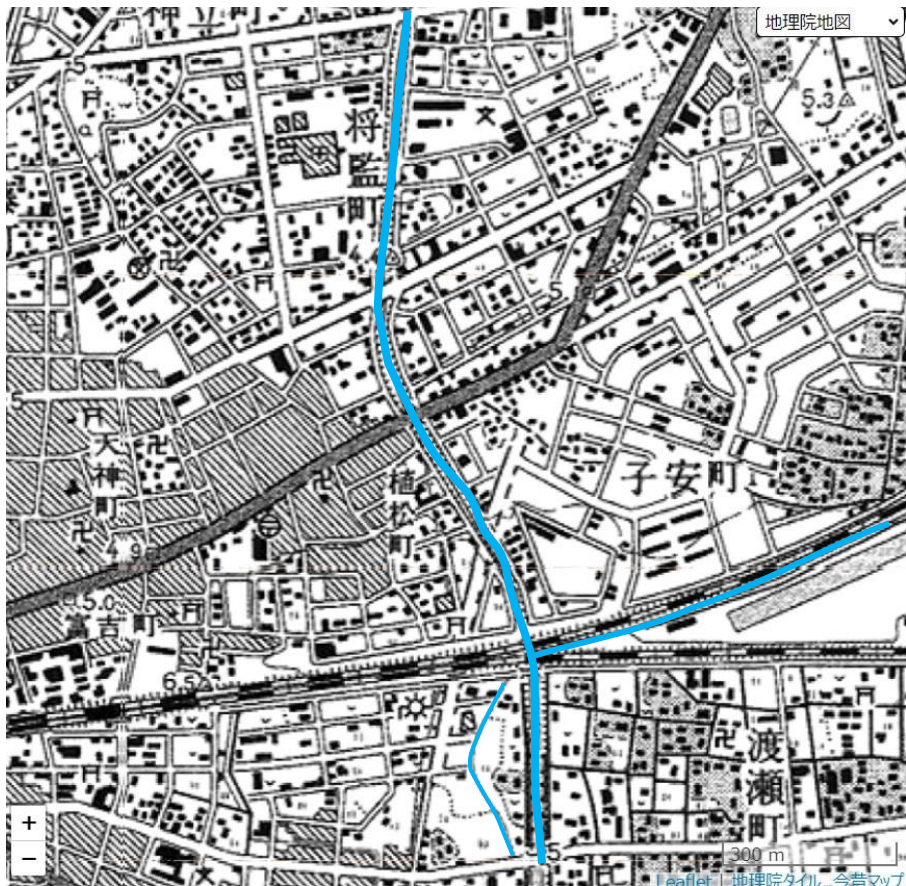
1916～1918 年 (T5～7)



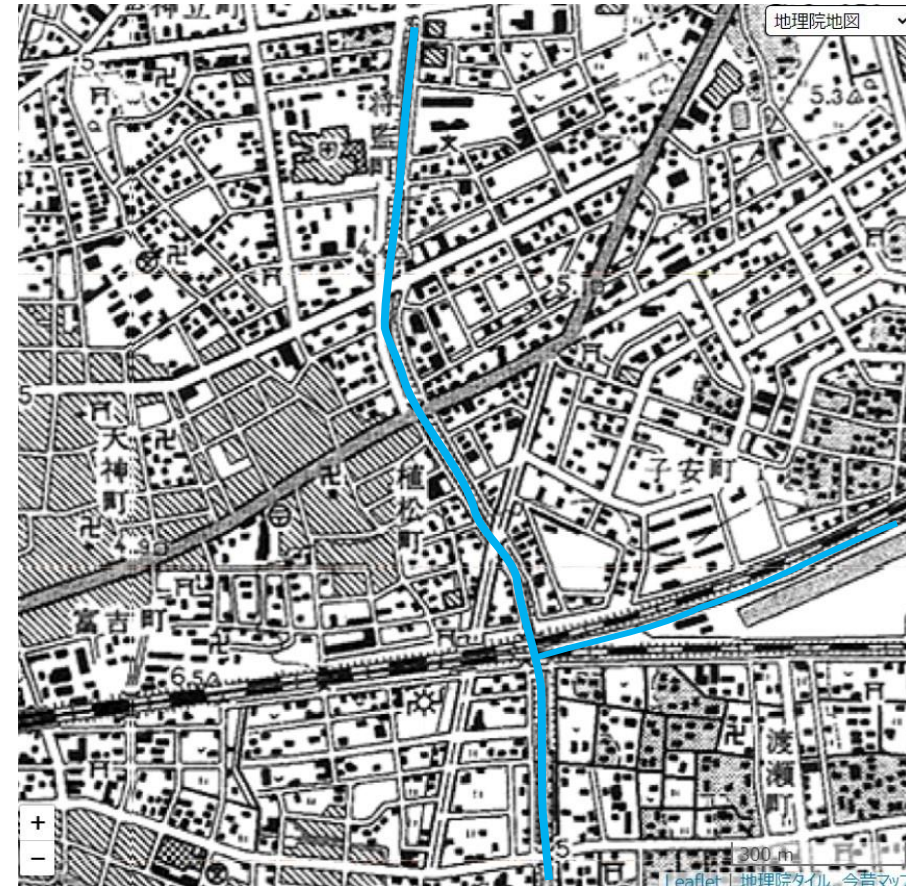
1956～1959 年 (S31～34)



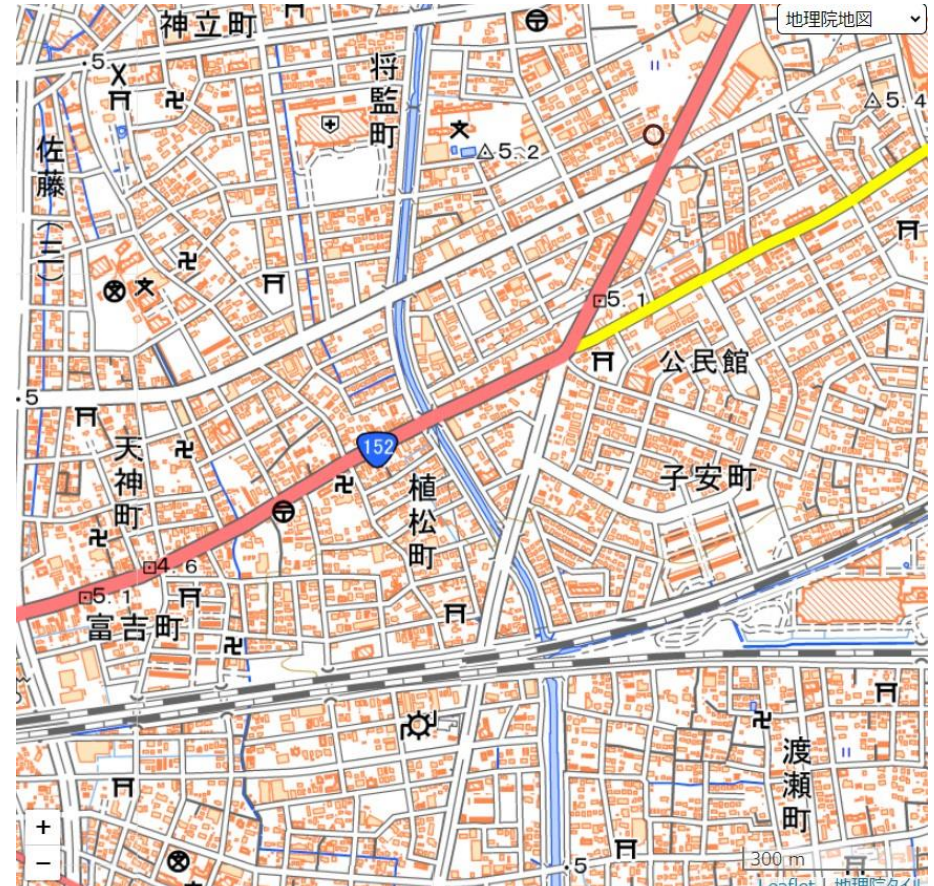
1975～1988 年 (S50～63)



1988～1989 年 (S63～H7)



2024 年 (R6)



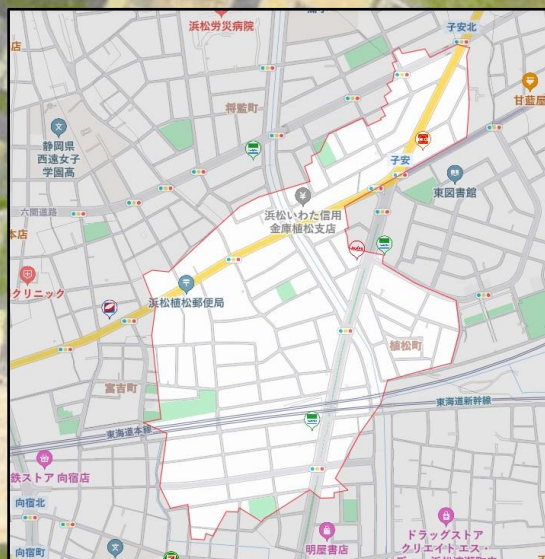
『植松町区画整理前』 航空写真

1963 年頃 (S38)

1959 年(S34)



現在の町境



東海道

荒川

円通寺

八柱神社

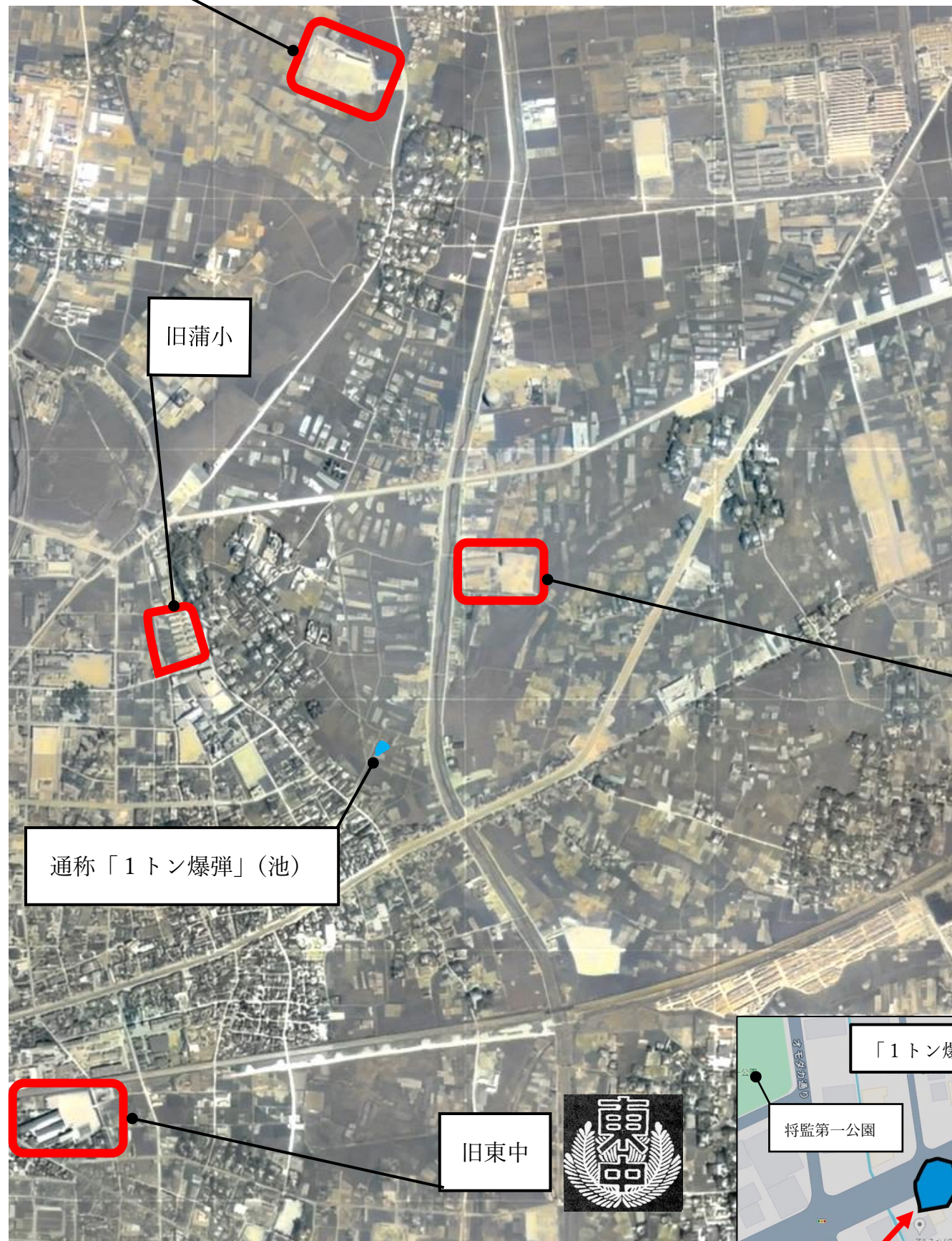
東海道線



『蒲の変遷』 航空写真

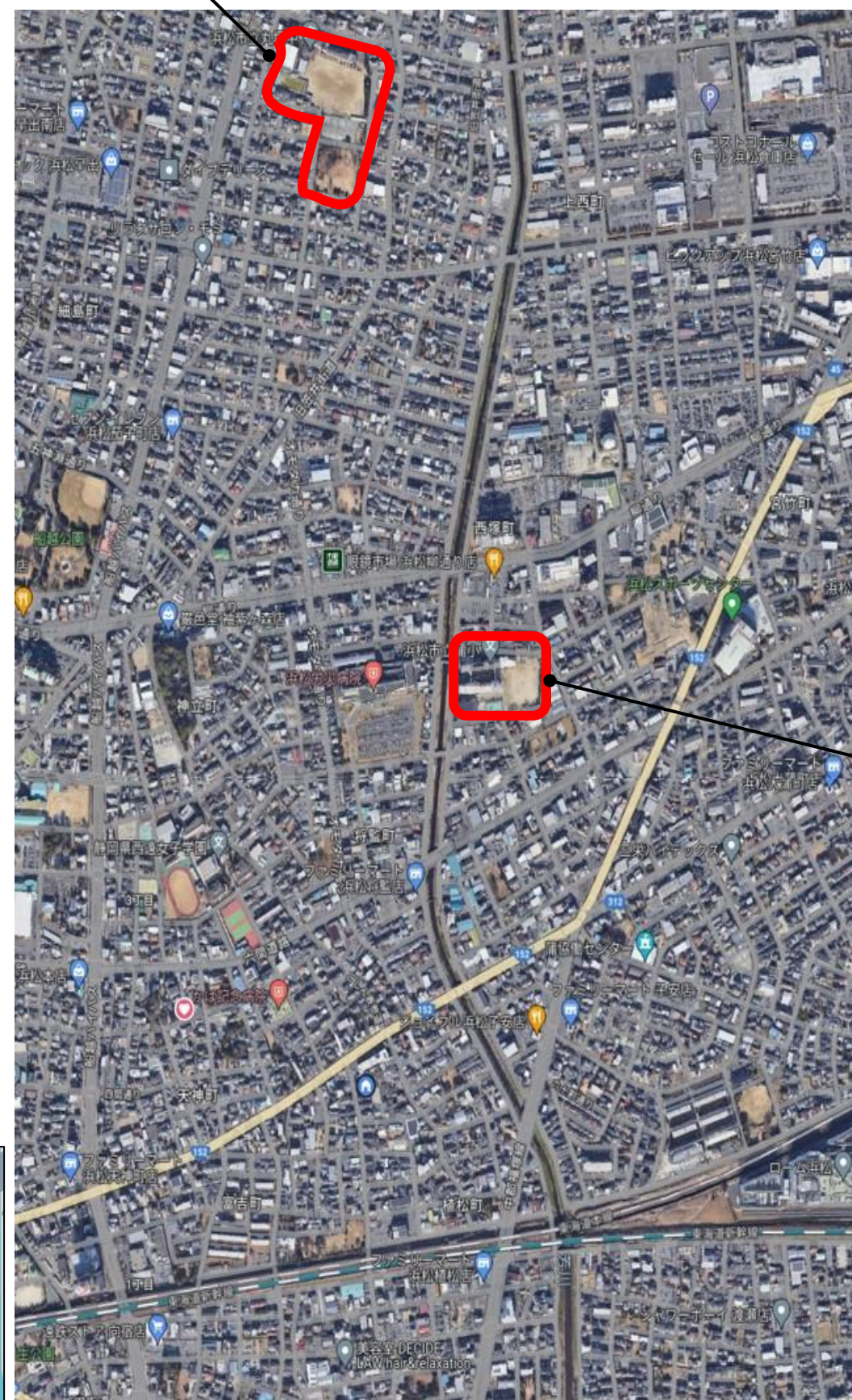
丸中

1963 年頃 (S38)



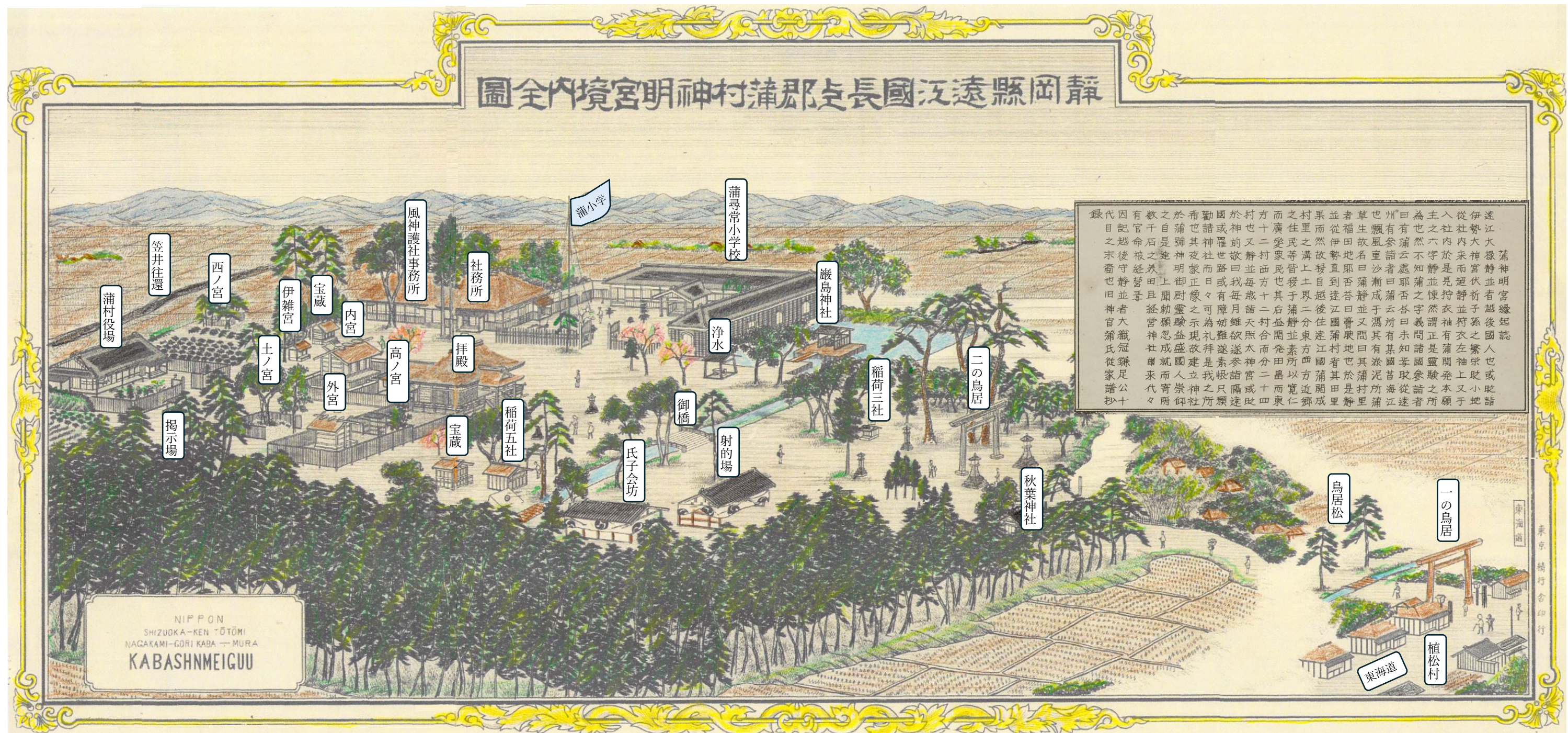
丸中

2024 年 (R6)



『静岡県遠江国長上郡蒲村神明宮境内全図』（資料：浜松市文化遺産デジタルアーカイブ）

蒲氏の先祖がこの地を開拓し、伊勢の両宮（外宮・内宮）を勧請したのは、大同元年（806）といわれている。開拓した土地は伊勢神宮に寄進し、蒲御厨^{みくりや}という神宮の荘園にしたのである。蒲神明宮となったのは明治に入ってから、式年遷宮も20年後ごとに行われ図に見える社殿は明治13年（1880）に造営されたものである。東海道の一の鳥居から鳥居松、社頭の大灯籠、二の鳥居、拝殿・内宮・外宮とつづく。境内には末社境内社が数多く見られる。また、広い境内を利用し、役場や学校が建てられている。明治中期の大きな神社の様子が手に取るように分かる。



あとがき

「植松町の記」作成において流用、引用した資料

- ・わがまち文化誌「袖紫ヶ森」浜松市立蒲公民館編
- ・浜松市立中央図書館石碑資料
- ・Google マップ
- ・沼津高専ウェブ地図
- ・「今昔マップ on the web」地理院地図
- ・その他ネット上の資料
- ・自身が撮影した写真

※本誌ページ末尾の「P 数字」は「袖紫ヶ森」の流用、引用したページを表す。

※「袖紫ヶ森」は 1995 年（平成 7 年）発行の為、年関係の数値（何年前・・・とか）が合わない箇所や記載家屋が今はない等の記述があったので内容の変更や削除をした。

表紙について

さくら：新松下橋付近よりの写真。ネットからの写真を利用。

石碑　：琵琶橋南東角にある「芳川改修の碑」

記録と記憶

記憶とは人々の心の中に残っているもの。記録は紙やメディアに残っているもの。人間は記録を見て記憶し、記憶を記録として残す。人間は常に記憶と記録という情報を行ったり来たりしている。記憶を記録（情報）に変える時、その人によって情報が作られ伝えられる。

作成 2024 年（R6）5 月 13 日 稲垣利幸